

郷土の活性化を図る地域の祭り参加者の実態調査

スポーツマネジメントゼミナール 1313001 秋野 和真

1. 研究動機・研究目的

地方の中心市街地で商店街のシャッター通り化が進行する一方、駅を隔てた反対側ではロードサイド店舗が増加し賑わいを見せる。この流れは、日本国内の多くの地域に共通し、その改善のために地域活性化の取組みが行われるようになって久しい。これまで、様々な地域が独自の資源や手法を取り入れて活性化に取り組んできたが、その手法のひとつに、地域の「祭り」も含まれる。佐々木 (2007) によれば、日本三大祭りの一つとされている京都の祇園祭は約 150 億円の経済効果を生み出すとされており、今祭りは地域経済活性化の重要なコンテンツとなっている。

これまで、祭りのイベント化 (石本 2015)、祭りと観光業の関係 (佐々木 2007) など、規模は違うが、様々な祭りが地域にもたらす経済効果や持続可能性の検証が行われてきた。しかし、実際に祭りに参加している人たちの属性、参加目的、価値観などを調べるような踏み込んだ調査は少ない。そこで今回、江戸時代 (天保 12 年) から行われ、約 160 年の歴史がある千葉県いすみ市大原の「大原はだか祭り」を対象に、祭りの深層部を明らかにしていく。

2. 研究方法

1. 文献調査：大原はだか祭に関する資料 (歴史、参加人数、報道記録)
祭りに関する資料 (祭りの定義、祭りの意義)
地域活性化や観光業に関する資料 (経済効果、観光業と祭りの関係性)
2. 質問紙調査
 - 1) 調査対象：いすみ市大原近郊在住の大原はだか祭の参加者
 - 2) 質問項目：個人的属性 (性別、年齢、職業、参加回数など)、集団同一視尺度、自己肯定意識尺度
 - 3) 実施日：2016 年 8 月 (調査)、9 月 (集計)

3. 主な結果と考察

本研究の目的は、祭参加者の参加回数と体力・家族内参加者・集団同一視・自己肯定意識との関係に着目し、地域の祭りの参加回数が多い人はどのような特性を持った人たちなのかを検証してきた。以下の仮説 1～4 を立ててそれに対して検証を行った。仮説 1 は、「大原はだか祭の参加者は参加回数が多い人ほど、体力に自信がある」というものであった。その結果、参加回数が多ければ多いほど、体力に自信がある人は多いという結果が得られた。体力を多く使う大原はだか祭には、体力に自信を持って参加する人が多いと考えられる。

仮説 2 は、「大原はだか祭の参加者は参加回数が多い人ほど、家族内の参加人数の割合が高い」というものであった。7 回以上参加した人は家族内で平均 2.22 人、5～6 回参加した人は平均 1.56 人、1～4 回参加した人たちは平均 0 人という結果になった。このことから祭

りに参加する頻度が多い人ほど家族ぐるみで行う傾向があることが分かった。仮設3は、「大原はだか祭の参加者は参加回数が多い人ほど、地域への集団意識が高い」というものであった。集団に対する所属意識を測る集団同一視尺度との関連性を見たところ、参加回数が多いグループほど12項目中11項目で高い数値を示していた。仮設4は、「大原はだか祭の参加者は参加回数が多い人ほど、自己主張・自己の確立がされている」というものであった。自己の確立や自己主張度を測る自己肯定意識尺度との関連性を見たところ、その関連性は見られなかった。

4. 結論

今回「祭りの参加者」を対象に地域の祭りの代表として、千葉県いすみ市大原で盛んな「大原はだか祭」をサンプルとして調査を行った。この祭りは、歴史があり体力を非常に使うという特徴があり、それらを考慮し考察し次の結論に至った。

大原はだか祭において、過去10年内の祭りの参加回数が多い人ほど、体力に自信があり、家族ぐるみで参加している人が多く、地域への集団意識（愛着度、成員意識など）が高い傾向にあった。これは、地域社会から自発的に運営されている・地域独自の文化を持つなどの祭りの定義や意義が参加者に反映されており、その地域の祭りの伝統が根付いているからだと考えられる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

私がこの卒業論文を執筆するにあたり、近年話題になっている観光業（主にインバウンドなど）や地域活性化（地方創生）を頻繁に耳にし、それがいかに身近な存在で現れているのかを知りたいと思ったのがきっかけであった。私は千葉県いすみ市大原で生まれ育ち、物心がついた時から「祭り」に触れ、祭りとともに育ってきた。そんな祭りが近年観光業の一つのツールとして注目を浴びており、国内外から来る観光客を賑わせ大きな経済効果を生んでいるというニュースを目にした。しかし、それらは経済効果を生む一つの「イベント」として捉えられており、祭り本来の定義・意義が無視されつつあるというニュースをも同時に目にした。つまり、本来祭りは祭り（神様）主体であるはずが、利益を追求するあまり自治体や営利目的の団体などの圧力により、利益主体に変化してしまっているということであった。そこで私は参加者と外部の人たちが共存共栄できる理想の形を知りたいと思い、まずはその第一歩として、イベント化されていない地域の祭り参加者の内部（実態調査）を調査しようという本研究に着手した。

本研究を行い、自身で立てた4つの仮説の内3つの仮説を検証することができた。これらを検証することができたことで、祭りの伝統は地域に根強く残っており、しっかりと継承されているということが確認できた。地域独自の祭りが住民を支え、また住民が祭りを支え、そして住民同士が地域を一つの集団として大切にしているということが分かり、日本の地域住民の関係性の素晴らしさを感じることができた。

最後に、本研究を行うにあたり協力していただいた小笠原先生を始め、アンケートにご協力していただいた地域住民の方々に、大変感謝しております。本当にありがとうございました。